

マックス・ウェーバーとヴェルナー・ゾンバルト

——ゾンバルトとその周辺の人々——

池田浩太郎

第1節 本稿の問題

第2節 ウェーバーとゾンバルト

1. 19世紀末におけるウェーバーとゾンバルト
2. 社会科学方法論でのウェーバーとゾンバルトの共同戦線

第3節 ゾンバルトの近代資本主義研究とウェーバー

1. 『近代資本主義』1902年の公刊
2. 『近代資本主義』の改訂準備作業
3. 『近代資本主義』第2版，二巻四冊，1916年
4. 『近代資本主義』第2版の完結とシュンペーターの書評

第4節 近代資本主義研究の一掃結——ゾンバルトとウェーバーの資本主義文化観——

第1節 本稿の問題

拙稿「アードルフ・ワーグナーとヴェルナー・ゾンバルト——ゾンバルトとその周辺の人々——」成城大学「経済研究」第150号，平成12年11月において，私はドイツ新歴史派経済学の新世代を代表する学者の一人ヴェルナー・ゾンバルト **Werner Sombart, 1863–1941** をとりあげた。そして，彼の学界デビューから1918年にベルリン大学経済学正教授就任までの，彼のアカデミック・キャリアーに即して，彼の師ないしは大先輩にあたると考えられる人々，すなわち，アードルフ・ワーグナー **Adolph Heinrich Gotthilf Wagner, 1835–1917**，グスタフ・シュモラー **Gustav Schmoller, 1838–1917** およびルーヨ・ブレンターノ **Lujo Brentano, 1844–**

1931の、ゾンバルトの学問的業績や人間性をめぐる評価について見てきた。次いで、ゾンバルトが最終的にたどりついた自身の社会思想のあらましを、外観的に類似性を見せている点にかんがみ、彼の師ワーグナーのそれと対比させつつ、紹介しておいた。

これを受けて本稿では、ゾンバルトと同時代を生きた知人、友人であるドイツ人学者たちとの、交流ないし交遊の姿を通して見た、学者および人間としてのゾンバルト像をえがいてみたい。

よくいわれるように、その生涯を通して「ゾンバルトは一匹狼であった。特記すべき学派ないしは学問分野の首領ではなかったのだ」¹⁾。

それゆえに、ここで特にとりあげるべき同時代の学者の数は、そう多くはならないであろう。その数少ない人々の内、そのゆえに本稿のタイトルにかかげた、マックス・ウェーバー Max Weber, 1864–1920こそは、ゾンバルト理解にとって、最も注目すべき友人の学者ではなかったか、と私には思われる。

広辞苑をひもとくと、ゾンバルト、マックス・ウェーバーの見出しは、それぞれ「ドイツの経済学者、社会学者」、「ドイツの社会学者、経済学者」という記述ではじまっている（傍点は筆者のもの）。よく考えてみると、この一言は両者の研究経歴、主要研究対象の特徴を表現しえて妙なものがある。

両者が学問研究者としてデビューした1890年代はじめ以降、1920年のウェーバーの死に至る一世代の間、社会科学上の関心の中心や研究方法などの点での、両者の相違をもわきまえた上で、なお、「ゾンバルトとウェーバーは友人であり道づれ Weggenosse であった」（Appel, 前掲書, 10ページ）のではなかろうか。しかも両者は、ともに20世紀のドイツ社会科学界での、ドイツ新歴史派経済学の新世代の旗手たるべく運命づけられた、

1) Michael Appel, Werner Sombart. Historiker und Theoretiker des modernen Kapitalismus, Marburg 1992, S. 10.

戦友 *Mitstreiter*¹⁾ でもあったのだ。

これらのことは、前稿で既述したワーグナーの、若き日のウェーバーとゾンバルトへの評価からも、間接的にはあるが容易に推測される所でもある。

第2節 ウェーバーとゾンバルト

1. 19世紀末におけるウェーバーとゾンバルト

イタリアの農業状態の、また西欧の一定の経済発展段階に到達した国の農業事情の典型としての、農業の社会的・経済的研究、そしてその改革についての農業政策的研究でもあった、ゾンバルトの学位請求論文『ローマ・カンパグナ』1888年 *Die römische Campagna. Eine sozialökonomische Studie, Leipzig 1888*. これには、急増大した社会的に価値なき不労地代所得者身分への批判（前掲『ローマ・カンパグナ』116ページ）に見られるような、ワーグナー流の国家社会主義的思想が、その核心部分に見えかくれしてはいる。とはいえ、ゾンバルトのこの著作は専門研究者の間では、概して圧倒的好評をもって迎えられたものでもあった。

それから三年の後に公刊されたマックス・ウェーバーの大学教授資格取得論文 *Habilitationsschrift* 『ローマ農業史』1891年 *Die römische Agrargeschichte in ihrer Bedeutung für das Staats- und Privatrecht, Stuttgart 1891*.

ウェーバーとゾンバルトの社会科学研究者としての出発点が、共にイタリアを対象にした業績の形で実ったことは、両者のこれからの宿命的関係を予兆するかのようであった。しかもウェーバーのこの著作には、すでにゾンバルトの『ローマ・カンパグナ』への言及さえも見られたのだ²⁾。

1) Gottfried Eisermann 1918-, *Max Weber und die Nationalökonomie*, Marburg 1993, S. 32.

ゾンバルトは暫らくの間は、ドイツでもイタリアでも、イタリア・エキスパートとして高く評価されていたようである。

以上のこと以外で、1890年代におけるウェーバーとゾンバルトとの関係で特記すべき事項は、次の二つくらいのものであろう。すなわち、

1. いずれも成功はしなかったのだが、ウェーバーがゾンバルトの学問的卓越性を承知していたことから、彼をフライブルク大学、ハイデルベルク大学での自分の講座の後継教授に推薦したこと。

2. ゾンバルトは「マックス・ウェーバーとともに、ドイツ社会政策学会における『左翼』の最重要な代表者になった」(Appel, 前掲書, 13ページ) こと、がこれである。

2. 社会科学方法論でのウェーバーとゾンバルトの共同戦線

20世紀に入ってから、ウェーバーとゾンバルトとの密接な交友関係を示す出来事を、二、三拾いだしてみよう。

その第1は、共に同じ専門学術雑誌の共同編集者になったこと。

その第2は、ドイツ社会学会 *die soziologische Gesellschaft* 設立に共に参画していること。

そして、これらを通して両者は、社会科学方法論の領域で共同戦線を張るようになったこと、が注目されるであろう。

発刊以来比較的好評であった社会科学雑誌、いわゆる「ブラウンス・アルヒーフ」*Archiv für soziale Gesetzgebung und Statistik*, hrsg. von Heinrich Braun. は新たなる編集者をえて新たなる構想のもとに、誌名も「社会科学および社会政策アルヒーフ」*Archiv für Sozialwissenschaft und Sozialpolitik* となって、その創刊号(第1巻, 第1分冊)が公刊された。1904年のことであった。

ブラウンス・アルヒーフの買収者であり、新しい雑誌の編集者になるべ

2) Max Weber Gesamtausgabe, Abteilung I, Band 2, Tübingen 1986, S. 299.

きヤッフエ Edgar Jaffé の要請で、彼の年長の友人マックス・ウェーバーおよびゾンバルトが、新しい編集者として登場したのである。

この創刊号では、編集者一同の名目でウェーバーが起草したといわれる序言 Geleitwort (Marianne Weber, 1870–1953, Max Weber. Ein Lebensbild, Tübingen 1926, S. 290) には、次のような趣旨のものが含まれていた。すなわち、ブラウンス・アルヒーフの編集方針をさらに一步すすめて、

1. 資本主義的発展の一般的文化意義の歴史的かつ理論的認識を、雑誌の問題とするがゆえに、ひろく隣接社会諸科学の研究と密接に接触すべきことになる。

2. 社会問題を本質的に強度に哲学的視点のもとで論じ、またわれわれの特殊領域の研究を、狭義の「理論」といわれるものに定式化すべく、明瞭な概念を形成する。そのゆえに認識批判と方法論の学問的作業を、不断におしすすめるべきことになる、としたのである¹⁾。

共編者のゾンバルトは、「経済恐慌の分類学への試み」*Versuch einer Systematik der Wirtschaftskrisen* という通常の長さの論文（刷り上り二ページ）をもって、その創刊号の巻頭を飾った。しかもこの論文には、内容的には特記すべきほどのものも見あたらない。単に経済恐慌の形態や特質などを、ゾンバルト流に分類し体系化して、そのシェーマを展望したにすぎないものであった。

これにたいしウェーバーは、彼が創刊号の序言で述べた二つの趣旨の内、先ずは第2のものを重視したのであろう。そしてこの序言の趣旨を徹底化し敷衍する形で、刷り上り六六ページにも達する長大論文を、この創刊号に発表したのである。「社会科学および社会政策的認識の『客観性』」*Die "Objektivität" sozialwissenschaftlicher und sozialpolitischer Erkenntnis* がこれである。

この論文で展開されたウェーバーの議論は、二つの論点に分けることが

1) 1. 2.とも前掲雑誌の創刊号の序言、V-VII ページにより紹介した。

できよう。

その第1は、客観的妥当性をもつ真理の探究たるべき科学としては、あることの認識と、あるべきことという価値評価とをまず峻別する。そして後者を社会科学、文化科学の領域から追放すべし、ということを論証することにあった。

その第2のテーマは、生活諸現象をその文化的意義の視点で認識すべき文化諸科学、社会諸科学における、歴史的個性を科学的に認識する手法をめぐる問題である。諸現象の総因果帰属的な解明を試みることは、そもそも不可能であるばかりでなく、かつ無意味でさえあるとウェーバーは考える。そこで彼が案出した、適切な理想型 *Idealtypus* という概念による、その認識が考察の中心となる。概念的純粋さをもって構成された、それ自体無矛盾的ユートピアでさえある理想型的概念に照らして、現実的連関における文化的に意義あるものを、科学的に測定し、比較し、特徴づけようとするわけである。そして、この概念の性格や構成方法、および現実認識におけるこの概念使用の限界や、新しい理想型概念の形成などについて、論じているのである。

マックス・ウェーバーのこの論文は、経済思想的にはシュモラーを総帥とする、ドイツ新歴史派経済学における倫理的傾向の混入を、学問の名において排除しようとした、価値判断の社会諸科学からの排除のための論争、いわゆる価値判断論争の導火線となったものであった¹⁾。

いまここで、ドイツ新歴史派経済学における新旧世代の対立を呼び起した、いわゆる価値判断論争自体について、立ち入るつもりは毛頭ない。しかしながら、このウェーバー論文の公表が、新歴史派経済学の新時代の到来を象徴する出来事となった、ということだけは述べておかねばなるまい。

1) 理想型概念など、マックス・ウェーバーの社会科学方法論そのものに関しては、すでにその方面の内在的研究の古典ともいべきものになっている労作、金子栄一『マックス・ウェーバー研究——比較研究としての社会学——』創文社、昭和32年、の第1章の論述を参照されたい。

そしてその新しい時代が、新しい姿を見せたアルヒーフの共編者である、マックス・ウェーバーとゾンバルトによって、もたらされることになったのだ¹⁾。

雑誌の共同編集者であるゾンバルトも、マックス・ウェーバーと同じ社会科学の方法論の上に立つ、新歴史派経済学の新世代の旗手であることを、明瞭にすべき機会がやがてやってきた。それはウェーバーとゾンバルトが共に出席した、1909年のドイツ社会政策学会ウィーン大会でのことであった。この大会でゾンバルトは、討論報告の形ではあるが、彼自身の方法的立場を明確に公表することになったからである。

ゾンバルトは、この大会での最重要なテーマの一つである、「国民経済の生産性」への討論者の一人として参加した。そして大要次のような発言をしている。すなわち、

上述のテーマを議論するこの日は、「社会政策学会の発展史上決定的な日である」(563ページ)²⁾。それは本学会がはじめて経済理論の問題を、共

1) ただし19世紀末の若きゾンバルトは、『ローマ・カンパグナ』1888年では、既述のように、やや国家社会主義的思想の片鱗を見せていた。また、1990年代後半から、マルクス主義の理解者らしい側面をも見せてきた。しかも1897年の論文「社会政策の諸理想」*Ideale der Sozialpolitik*, in: *Archiv für soziale Gesetzgebung und Statistik*, 10. Band, 1897. においては、もはやシュモラー的倫理派経済学の信奉者ではなかった。ゾンバルトは、客観的、学問的に証明しようとするような価値評価観点は、そもそも存在しないとする。「すべての政治的努力は、その究極の根拠を個々人の総世界観と人生観の内にもっている。しかしこれは、終局的には、認識が追及できない信仰の形而上学的領域にまで達しているのである」(ゾンバルト、前掲論文、12ページ)。

それゆえゾンバルトは、暫定的に社会政策の理想を経済内のものに求めた。すなわち、最高の生産可能性、経済的に完全なもの、そして経済的進歩を代表する社会階級の、最も有効なる助成などに求めたのである(同、44ページ)。

ゾンバルトの以上のような見解をもって、1904年のウェーバーの既述の「客観性」論文の先駆と見る学者も存在したようである。

しかしいずれにしても、20世紀に入ってから、ゾンバルトはウェーバーとの交流を通して、明確に価値自由のウェーバー陣営にあることを、示すようになった。

2) 単にページ数のみを示してあるのは *Schriften des Vereins für Socialpolitik*, 132. Band, *Verhandlungen des Vereins für Socialpolitik in Wien, 1909*, Leipzig 1910. のページ数である。以下も同じ。

同討議することになったからである。

ゾンバルトは、「まさにわが友マックス・ウェーバーとは方法的見解において、根本的には同一理解なのだが」(566 ページ)と前おきして議論をすすめる。

ゾンバルトは社会科学的研究にあたっては、存在認識と認識されたものの(倫理的・政治的)価値判断とは、峻別さるべきものであるとする。そして後者は、現実的には如何に重要なものであろうとも、「それぞれの価値判断は、究極的には人間の個人的世界観に根づいたものである。個人的世界観はつねに形而上学的基盤の上にある」(568-569 ページ)。それゆえにこれは、学問的考察からは除外すべきであるとした。

そして、これらの事柄をゾンバルトは、学史にも残る印象的な譬え話しの形で、述べているのである。すなわち、

「だが私は、ウィーンがベルリンよりも美しいことを、何人にも証明できない」(570 ページ)。「価値判断に関しては、われわれはブロンド髪の女の方が、あるいはブリュネット髪の女の方が、一層きれいで感じよいかを、学問的に立証しえない間は、学問的には討議できないのだ」(572 ページ)。

ゾンバルトの報告終了の後、間に二名の討論報告をはさんで、ついに価値判断論争の立役者マックス・ウェーバーが、討論者として登壇することになる。社会科学における価値判断排除の問題を、彼が簡潔に再説すべき時がきたのである。

しかしここでは、ウェーバー発言の全体構成については、あえて再述せず、ただ彼の二、三の言葉のみを示すにとどめておこう。

「学問的問題に、あるべきことを混入することは、悪魔の仕業というものだ……」(582 ページ)。「墮罪は、かかる純粋に経験のかつ純粋に論理的思考系列に、主観的・実際の価値判断を混合させるときに、はじめてはじまるのである」(583 ページ)。「われわれは学問的に証明しうる、いかなる

理想というものも知らないのだ」(585ページ)。

そしてこれらの箇所では、必ずといってよいほど、「これはわが友ゾンバルトと見解が一致している所であるが」といった注釈が付されている。しかも十分程度の短い時間のはずの(刷り上りで5ページほどの)、ウェーバーの最初の討論報告の間に、七回もゾンバルトの名をあげて、彼と見解を同じくしていることを、非常に強調している。これはウェーバーの最初の討論報告での、きわめて印象的な事柄であった。

ゾンバルト、ウェーバー両者の相次いだ共同戦線の発言によって、ドイツ新歴史派経済学における新世代の方法的立場が、まさにその旗手たる両名のものであることが、これでドイツ経済学界全体に、明瞭に認識されるようになったのである。

この新しい方法的立場は、ことゾンバルトに関しては、ウェーバーの死後10年にして公刊された、彼のライフワーク『近代資本主義』研究の総決算であり、「いわばそのカタログともなるべき」¹⁾『三つの経済学』1930年 Die drei Nationalökonomien, München und Leipzig 1930. に至るまで、基本的には変らなかった、といえよう。このことをここで付言しておきたい²⁾。

1) 『三つの経済学』342ページ。

2) ついでながら、20世紀に入ってからウェーバー、ゾンバルト両者の密接な交遊関係を示す、第2の出来事にもふれておこう。

1909年末から10年はじめにかけて、マックス・ウェーバーは「年¹⁾老いたドイツ社会政策学会を、純粋に学問的討議の側から補完できるような社会学会というものの設立を、ジメメル Georg Simmel, 1858-1918, ゾンバルトおよび他の人々とはかった」(マリアンネ・ウェーバー、前掲書、425ページ)。そして、実質的にはウェーバー主導のもとで、1910年秋、ともかくもフランクフルト・アム・マインで第1回の大会開催にこぎつけたのである。これにはもちろん、ゾンバルトも参加した。

第3節 ゾンバルトの近代資本主義研究とウェーバー

ウェーバーとゾンバルトの資本主義研究について考察してみよう。

これをスローガンのように結論づけると、次のようにいうこともできる。

ドイツの社会学者、経済学者であるマックス・ウェーバーは、周知のとおり、近代世界の魔術からの解放 *die Entzauberung der Welt*, ないし近代社会の合理化過程を構成する重要な一環として、西欧近代資本主義を社会学的、経済学的に分析しようとするものである。

しかし、ドイツの経済学者、社会学者であるヴェルナー・ゾンバルトは、近代ヨーロッパの経済体制それ自体を、歴史的、一回的なものとして、これを資本主義の概念のもとに統一的、体系的に理解し、経済学的、社会的に分析しようとする者であった。

したがって、ここでは主としてゾンバルトの資本主義についての研究業績を、年代順にかえりみながら、これを通して副次的に、資本主義研究についての両者の関係を見てゆくことに、ならざるをえないであろう。

1. 『近代資本主義』1902年の公刊

すでに1890年代より社会主義・マルクス主義経済学の理解者として、令名を馳せていたゾンバルトは、1902年畢生の大著『近代資本主義』*Der moderne Kapitalismus, 2 Bde., Leipzig 1902.* の初版全二巻を公刊した。

この初版は、「資本主義の発生」*Die Genesis des Kapitalismus* を論じた第1巻と、「資本主義的発展の理論」*Die Theorie der kapitalistischen Entwicklung* を取り扱った第2巻とをもつ、本文（索引なども含む。以下も同じ）1,300ページをこえる、文字通りの大著であった。

この著作は、西欧諸国それぞれの国民経済的特性を、一応、特に顧慮することなしに、総ヨーロッパの経済的諸現象を、資本主義という全く新しい用語と概念を基軸に、その成立、生成、発展といった形で統一的、体系

的に理解しようとしたものである。

まさにこの著作は、社会科学的研究における、並びに一般社会における、資本主義という用語ないし概念の使用と普及との、発端となったものでもあるのだ。

しかしゾンバルトのこの大著は、専門の経済学者の側からは、バラバラに、それもおおむねそう高くはなく評価されるにとどまった。その代表例として、ゾンバルトの大先輩ないし師に近いほどの年齢の経済学者ブレンターノの、反論的書評をあげておこう¹⁾。

しかも専門の歴史家ないし経済史家たちは、ゾンバルトがこの著作で定立した諸テーゼにたいして、一斉に防衛戦をおこなうようになったようである。かれらの批判の内、最も代表的なものの一つは、ドイツ中世社会・経済史の大家ゲオルク・フォン・ベロウ Georg Anton Hugo von Below, 1858–1927 の書評論文「近代資本主義の成立」1903年 Die Entstehung des modernen Kapitalismus, Historische Zeitschrift, 91. Band, 1903. である、

1) ブレンターノの六十ページをこえる長大論文「商業と資本主義」Handel und Kapitalismus, in: Der wirtschaftende Mensch in der Geschichte. Gesammelte Reden und Aufsätze, Leipzig 1923. は、ゾンバルトの『近代資本主義』初版の書評論文といわるべきものである。これにはわれわれは邦語で接することができる(田中善治郎訳・ルヨ・ブレンターノ『近世資本主義の起源』有斐閣, 昭和16年, 71–145ページ)。

ブレンターノは営利追求というものを中軸に据える資本主義観をもとに、資本主義の成立についてのゾンバルトの歴史的叙述の部分には、さまざまな経済史的異議を唱えている。たとえば、

資本主義的経済組織の対立物は、手工業的経済組織ではなく、実物経済とそれに由来する封建的経済組織ではないのか(ブレンターノ, 前掲原著, 307ページ)。

中世の経済組織の中心的特色は手工業ではなく、土地の貸与ではなかったのか(同, 313ページ)。

理論的にも、早くもゲルマン中世で、すでに最大利益の追求が、人間の経済行動の原則であった、といえるのではなからうか(同, 358ページ)、等々。

ともあれ、個別的には多々批判すべき点があるにせよ、ゾンバルトのこの著作は、明白に非常に資質豊かな人物の、特に勤勉かつ包括的研究の成果としての理論的著作であり、歴史的著作ではない、とブレンターノは総括しているのである(同, 301ページ)。

と考えてよいかも知れない¹⁾。

これらの人々の批判とは異なって、ドイツの一般知識階層からは、ゾンバルトの『近代資本主義』1902年は、かなりの好評をもって迎えられたようである。

ゾンバルトの『近代資本主義』初版では、数ヶ所でマックス・ウェーバーの業績が引用されているのが目につく。

また、この初版、第1巻、第2編には、「資本主義精神の発生」を叙述

-
- 1) 私がここで使用するのは、ペロウの著作 *Probleme der Wirtschaftsgeschichte*, Tübingen 1920. に改訂の上収録された、上記のものと同じタイトルの第7論文である。その中でも私は、特に直接ゾンバルトのこの著作の初版の紹介と批判に充てられている 435-499 ページに関心をもつ。

この書評論文は、いわばドイツ新歴史派経済学の創始者シュモラー、そしてその新世代の代表と目されるゾンバルトが、くりかえし歴史家たちを低評価してきたことにたいして、「歴史的方法の労苦多い方途のみが、最終的に確実な目標に到達させる」(ペロウ、前掲書、496 ページ) ことを想起さすべく、筆をとったものようである。

ゾンバルトのこの著作にたいしては、特に、中世都市の市民がまさに商業経営で富裕者になりえたのではなく、当時の資本集積は地代の蓄積によるのみ可能となったのだ、というゾンバルトのテーゼにたいし、資料的検討にもとづいて反論する。そして、当時の商業利得がたとえささやかな経営からのものであるにせよ、多くの商人が富裕者となりうるには充分であったし、地代からの利得は、都市の商工業の発展によってはじめて大きなものとなった、としたのである(同、序言、VIII ページ)。

天賦の芸術家的資質にめぐまれたゾンバルトが、心血を注いで完成させた著作。著しくすぐれた所もあるが、しかしいくつかの関連で、明白に誤った道を行ってしまった著作(同、435, 492 ページ)。ゾンバルトの『近代資本主義』についてペロウはこう総括した。個々のゾンバルト学説についてのペロウの批判に関しては、ここでは紹介しないでおこう。

かわって、1903年のドイツ歴史学会議のハイデルベルク大会での一エピソードを紹介しておきたい。

かねてよりシュモラー嫌いで通っていたペロウは、この大会でシュモラーの門下生ゾンバルトの業績『近代資本主義』にたいしても、きわめて意地悪い批判をおこなったようである。この批判にたいしてゾンバルトもまた、冷笑的態度をもって応答したようである。これらが共に、心ある大会出席者たちのひんしゅくを買った。そしてことゾンバルトのアカデミック・キャリアーに関して、大会に出席していたバーデンの政府関係者は、かねてマックス・ウェーバーが推していたにもかかわらず、印象のきわめて悪かったゾンバルトを、ハイデルベルクでのウェーバー自身の後任に考えることは、とてもできない旨ウェーバーに伝えた由である(大林信治訳、パウル・ホーニヒスハイム『マックス・ウェーバーの思い出』みすず書房、昭和47年、19-21 ページ)。

する二つの章も見られる。そしてここでの資本主義の精神の社会学的取り扱い、マックス・ウェーバーに大きな影響をあたえた、ともいわれている (Appel, 前掲書, 14 ページ)。

2. 『近代資本主義』の改訂準備作業

『近代資本主義』にたいする、さまざまな批判を受けてのことでもあろうか。この著作公刊以降ゾンバルトは、この大著の論述を改善すべく、この問題領域内における若干の重要事項の研究を、特に深化させることに専念すべき運命となったようである。

そしてその成果として、まず 1911 年に『ユダヤ人と経済生活』Die Juden und das Wirtschaftsleben, München und Leipzig 1911, XXVI+476 S. が公刊されるはこびとなった¹⁾。

1) ゾンバルトのこの著作についてのブレンターノの詳細な書評にも、同じく邦語で接することができる (前掲邦訳書, 227-308 ページ)。

ユダヤ人を資本主義ないし資本主義精神との関連から、歴史的に追求することになったブレンターノの書評論文「ユダヤ人と資本主義」Judentum und Kapitalismus の論調は、既述の「商業と資本主義」のケースとはかなり異なっている。

ブレンターノはゾンバルトのこの著作について、次のように述べている。すなわち、

この著作はドイツの学問領域での最もなげかわしい出来事の一つである。そしてこの著作は、ゾンバルト自身の思いつきを、反論の余地なく正しい学問上の命題とみとめさせようとする、自らをスーパーマンとうぬぼれている高慢ちきの軽佻さにみちている (ブレンターノ, 前掲原著, 428-430 ページ), と口をきわめて罵っているのである。

そしてブレンターノは、資本主義ないし資本主義精神の発生にたいするユダヤ人の役割の側面から見ての、ユダヤ人とその経済活動のあり方についての、ゾンバルトの個々の歴史的記述部分の、誤りないしこれにたいする反対意見を数多く記すことになった。ブレンターノがユダヤ民族は元々は商業民族ないし遊牧民族ではなく、農耕民族ないしは手工業民族であった、と主張することなどその一例である。そしてついにはブレンターノは、「経済領域でのヘレニズム精神が資本主義の精神であった」(同, 490 ページ), と結論づけているのである。

ブレンターノのゾンバルトへの敵対感情は、これだけ述べてもなお、おさまらなかったのであろうか。追い討ちをかけるかのようにブレンターノは、資本主義的企業と共に富の追求、資本の価値増殖といった、抽象的・無限的目的が

次いでゾンバルトは、資本主義の成立と発展のための重要なテコともなるべき、需要側面の経済史的研究にも注意を向けた。

一国の経済的安定と発展への最重要な動力の一つとなるべき、一国の需要の、したがって生産の量的増大、質的上昇に直接連なる重大要因として、またその他の側面でも経済発展に重大な役割を演ずるものとして、ゾンバルトは次の二つのものを取りあげた。

一つは、近代における男女両性間の関係の変化にともなう、社会の上層階級の生活様式の変化の象徴ともいえる、宮廷をはじめとする大量の奢侈的消費需要の発生と増大。次いで、成立し拡充を続けた近代国家の常備陸・海軍制度にともなう、大量かつ均質で最先端の装備需要、常備軍維持のための衣食住提供の必要、巨大な戦争需要。これら二つのものに特に注目したわけである。

そして1913年には、まず、第1巻『奢侈と資本主義』Luxus und Kapitalismus, VIII+220 S. を、次いで第2巻『戦争と資本主義』Krieg und Kapitalismus, VIII+232 S. を、『近代資本主義の発展史のための研究』Studien zur Entwicklungsgeschichte des modernen Kapitalismus, 2 Bde., München und Leipzig 1913. という総括的タイトルのもとに公刊した。

続いて同じく1913年、ゾンバルトは彼の資本主義の精神史にかかわる研究の深化の成果でもあった、「近代経済人の精神史のために」という副題をもつ『ブルジョア』Der Bourgeois. Zur Geistesgeschichte des modernen Wirtschaftsmenschen, München und Leipzig 1913, VII+540 S.

出現した、というゾンバルトの資本主義精神論に支持をあたえた、「社会科学および社会政策アルヒーフ」の論文「プロテスタントの倫理と資本主義の精神」1904-05年 Die protestantische Ethik und der Geist des Kapitalismus. の執筆者マックス・ウェーバーを引き合いにだす。

そして、ゾンバルトの盟友ウェーバーのこの論文へのプレントナーの反論は、彼を「非凡な精神、並外れた学識、冷厳な学問的真摯さをもつ人物として尊敬」(同、428ページ)した上でのことだ、とウェーバーを持ち上げたのである。

を世に問うた¹⁾。

3. 『近代資本主義』第2版，二巻四冊，1916年

その初版発行の1902年以来，十数年に亘ってゾンバルトの資本主義研究深化のための，以上のような個別的・歴史的研究の積み重ねが見られた。これらをもとにして，ついにその全面的訂版ともいべき『近代資本主義』第2版の公刊が，はじまることになったのである。その最初の二巻四冊が世に問われたのは，第1次世界大戦中の1916年のことであった。そしてそれが，「端緒より現代に至る総ヨーロッパ経済生活の歴史的・体系的叙述」という副題をもつ，三巻六冊，本文3,200ページをこえる大著としての完成を見たのは，それからなお，十年あまり後の1927年のことであったのだ²⁾。

Appel, 前掲書，33ページも述べているように，1897年にはすでにゾンバルトは『近代資本主義』公刊のための作業に取りかかっていたので，その完成には，彼の壮年期の三十年あまりをすべてこれに投入した，といっても過言ではない，ということになるであろう。これはまさに，文字通り名実共に，ゾンバルトの畢生の名著であった。

そしてゾンバルトは，この著作によって「1920年代には，資本主義のそびえ立つ理論家であり，かつ歴史家ともなったのだ」(Appel, 前掲書，16

1) ゾンバルトはこの著作で，営利への衝動や企業家のもつべき征服者的・組織者的・商人的資質，節儉と勤勉さらには(経済的)計算能力など，これらの多面的複合体を資本主義の精神としてとらえる。そしてこの資本主義の精神の発生と生成とを，諸国民の特性，諸宗教(宗派)など，さまざまな社会的・文化的条件との関連から，包括的に，かつバランスよく論じようとしているのである。

ゾンバルトの師シュモラーは，ゾンバルトの美的・文学的個性をみとめつつも，この著作をもって，「みごとな才気に満ちた著作ではあるが，決して真の学問的かつ学識ある書物であるとはいえない」(Schmollers Jahrbuch, 38. Bd., 1914, S. 964)と総括している。

2) ゾンバルトの『近代資本主義』改訂第2版，三巻六冊からの引用などに関しては，すべてその1928年版によることにする。

ページ)。まことにゾンバルトの『近代資本主義』第2版は、シュモラーの創始したドイツ新歴史派経済学の、頂点をさわめた、しかもその最後を飾った業績であった、といわねばならないであろう。

ゾンバルトは『近代資本主義』第2版では、経済学を中心概念であるべき経済体制 *Wirtschaftssystem* の概念をもちだす。それは一定の経済志向 *Wirtschaftsgesinnung* が支配し、一定の技術が適用される所の、一定の経済組織を意味する（『近代資本主義』第2版, I, 21 ページ）。

この場合、近代ヨーロッパ全体における支配的経済体制を、ゾンバルトは資本主義経済体制と規定した。そしてこの資本主義経済体制について、ゾンバルトはあたかも生物の一生のような段階区分をおこなう。すなわち、

1. 前資本主義体制との闘争から漸次支配的経済体制となりつつある、初期資本主義 *Frühkapitalismus* の段階（幼・少年期）。
2. 資本主義体制が純粹に、ないしは圧倒的な支配的経済体制として展開された高度資本主義 *Hochkapitalismus* の段階（青・壮年期）。
3. 資本主義体制以後のものと思われる要素が、漸次資本主義経済体制の内で育ってくる後期資本主義 *Spätkapitalismus* の段階（壮・老年期）。

この三段階区分がそれである。

その上でゾンバルトはまず、近代ヨーロッパの支配的経済体制である資本主義経済体制を、本書の中軸に据える。そしてヨーロッパ全体の経済生活のさまざまな個別的側面を、その端緒から現段階まで、その時々々の支配的経済体制ないし資本主義の発展段階を基礎に整理を試みる。そしてこれを発生的、体系的に（これは同時に歴史的、社会学的にを意味する）叙述することを、ゾンバルトは志したのである（同, I, 23 ページ）。これは本書の副題の示す所である。

その結果、本書の第1巻、本文919ページは、前資本主義経済体制の時期（自給経済的体制の支配の時期と手工業的経済体制の支配の時期）の経済生活と、近代資本主義経済体制の歴史的基礎の叙述に充てられることになった。

同じ時期に公刊された本書の第2巻、本文1,229ページでは、初期資本主義段階の時代、特に16・17・18世紀の総ヨーロッパ経済生活が叙述された。

『近代資本主義』第2版、二巻四冊、1916年の公刊は、ゾンバルトのアドルフ・ワーグナーのベルリン大学経済学講座の後継者としての推挙の件にも、一応有効な作用をもったようである。

このことから推しても、この改訂第2版は、初版のケースよりも一層歴史的な著作となったにもかかわらず、単に経済学者のみならず、専門の歴史家や経済史家などの間でも、相対的には好評をもって迎えられた、と考えてよいのかも知れない¹⁾。

-
- 1) われわれが邦語で接しうる、当時の経済史家、歴史家計二人の論述を見よう。まずはロシア系の経済史家クーリッシャー Josef Kulischer, 1878-1934 の『ヨーロッパ中世経済史』増田四郎監修・伊東栄・諸田実訳、東洋経済新報社、昭和49年 Allgemeine Wirtschaftsgeschichte des Mittelalters und der Neuzeit, 2 Bde., München 1928. Erster Band; Das Mittelalter. (ただし本稿では Berlin 1954年版を使用)を見よう。

クーリッシャーは、

1) 手工業体制の展開(利害)と都市経済の特徴(利害)との密接な関係をもとめることによって、ゾンバルトもまた、中世都市に関する新しい概念をあたえ、しかも都市形成について洞察力のある新理論を提示することになったこと(原著、100ページ)、

2) 中世商業の過大視へのいましめは、一定の制限付きではあるが、ゾンバルトの不滅の功績であること(同、264ページ)、をみとめた。

これらの例からも想像されるように、クーリッシャーは全体的には、ゾンバルトの『近代資本主義』第2版、二巻四冊に比較的好意的であったことが看取されよう。

もう一つの例として、ウィーンの大中世史家ドプシュ Alfons Dopsch, 1868-1953の名著『ヨーロッパ文化発展の経済的社会的基礎』野崎直治・石川操・中村宏訳、創文社、昭和55年 Wirtschaftliche und soziale Grundlagen der europäischen Kulturentwicklung, aus der Zeit von Caesar bis auf Karl den Großen, 2 Teile, 2. Aufl., Wien 1923 und 1924. におけるゾンバルトの『近代資本主義』第2版の評価を見ておこう。

周知のようにドプシュは、古代ヨーロッパと中世ヨーロッパとの、文化発展の連続性を歴史的に明らかにしようとした。そこで彼は、たとえば、ゾンバルトが初期中世の商業を、ささやかなものとして重視しておらず、しかもそれが小規模商業であったと説くのは、ゾンバルトの史料の読み違いであるとした(原著、II, 466-468ページ)。またドプシュは、ゾンバルトが8世紀から10世紀にかけて、ヨーロッパはついに自給経済の極限の点に到達したと考えたこと

4. 『近代資本主義』第2版の完結とシュンペーターの書評

ゾンバルトの資本主義研究の進捗は、おそらくは、彼をも大いに苦しめたであろう、第1次世界大戦末期から戦後の20年代に亘る、ドイツの社会的・経済的大混乱もあって、かなりの程度阻害されたことと想像される。だが、とにもかくにも、1927年には『近代資本主義』第2版、第3巻『高度資本主義時代の経済生活』Das Wirtschaftsleben im Zeitalter des Hochkapitalismus 二冊が公刊にこぎつけた。

この第3巻は、彼が高度資本主義時代と規定する、およそ1760年代頃から第1次世界大戦にいたる150年間の、全ヨーロッパの経済生活が論述の対象となったものであった。

かくして、その「端緒より現代に至る総ヨーロッパ経済生活の歴史的・体系的叙述」である、ゾンバルトの『近代資本主義』第2版は、三巻六冊の大著となって、1927年一応の完結を見たわけである。

『近代資本主義』第3巻の「序言」において、ゾンバルトは三十余年におよぶ近代資本主義研究の実質的完結を思い合わせてか、自らの研究に非常に大きな影響をあたえ続けた、マルクスの経済学研究と自らの資本主義研究との関連を、回顧的に語っている。

ゾンバルトは、自らの著作『近代資本主義』をもって、資本主義の理論家であり、また歴史家でもあった天才マルクスの著作の、ある意味での完結編とさえ考えているのだ(同, III, XIX ページ)。

しかし、その見解の本質的な点では両者は異なっている。そしてその相

をも(同, II, 515 ページ)、歴史家的視点から史料をもとに批判したのである。

ドブシュは、いかにも史実をゆるがせにしない真の歴史学者らしく、ゾンバルト流の経済体制概念を中軸に据えた歴史的・社会学的手法が、ゾンバルトの才気あふれる芸術家的資質と相俟ってえがきだす、彼の構成物としての歴史的時代像の、均齋を保った美しさについても、さして注意を払わない。

かえってこれを、たとえば、中世の商業をきわめて小規模だとするゾンバルトの主張を、「彼の誇張ずきな性格にふさわしく、これをさらに一層尖锐化した」(同, II, 467 ページ)、という風に評価したのである。

違は、ある種の内的必然性をもって、両者の著作の書かれた時代の相違から生じたものである。すなわち、高度資本主義がまさに盛んになりつつあった資本主義の新しい時代と、その終末が近づきつつある時代との相違に由来する、とゾンバルトはいうのである（同、III, XIX ページ）。

かくしてゾンバルト自身、自らの大著について、これで「マルクスが魔術から解放されるであろう」（同、III, XXII ページ）、すなわち、マルクス学説の学問化がなされた、とするのである。

だがその結果、ゾンバルトのこの著作が、いまや実用的ではない認識、内なる啓示を求めるもの、みごとな芸術品の観賞対象のようなもの、となりおおせてしまっていることは、まことにやむをえないことだ、とゾンバルトは考えている（同、III, XXII ページ）¹⁾。

1) ついでながら、マルクスの時代とゾンバルトやウェーバーの時代との相違は、マックス・ウェーバーほどの天才の、理論的かつ歴史的に経済生活を把握した著作でさえ、マルクスの著作の具えていたような魔力をもはや、もたせることができないでいる、とゾンバルトが評していることも、ここでは記憶すべきことであろう（同、III, XXI ページ）。

ゾンバルトがマックス・ウェーバーの著作として、ここでまず思いうかべているのは、彼の遺著『経済史』1923年 *Wirtschaftsgeschichte von Max Weber. Abriß der universalen Sozial- und Wirtschaftsgeschichte, aus den nachgelassenen Vorlesungen*, hrsg. v. S. Hellmann und M. Palyi, München und Leipzig 1923. であろう。ウェーバーのこの遺著は、資本主義研究におけるゾンバルトとウェーバーとの密接な関係を、ある程度推測させてくれそうである。

この著作で目につくことは、ウェーバー自身のものを除いては、他を圧して最も多く言及されている著者ないし著作は、ゾンバルトであり、彼の資本主義研究の成果である諸著作であった、ということである。

尤もそのすべてにおいて、ウェーバーはゾンバルトの見解に賛意を表しているわけではないようである。たとえばウェーバーは、

1. 植民地貿易による資産の形成の、近代資本主義成立への意義は、ゾンバルトの強調した所とは異なって、小さい（ウェーバー、前掲書、258 ページ）とか、

2. 地代が都市や商業の母であったというゾンバルトの考え方は、原理的に誤っており、商業こそが最初の都市形成に決定的影響をおよぼした（同、277 ページ）とか、

3. ゾンバルトのように、貴金属の流入が資本主義の成立の唯一の原因であるとはいえない（同、301 ページ）、

などと異を唱えている箇所もある。

しかしいずれにしても、ウェーバーのゾンバルトの業績への言及の、他を圧

ゾンバルトの『近代資本主義』第3巻については、オーストリア学派の第3世代に属し、かつケインズと並んで20世紀最高の経済理論家の一人である、ヨーゼフ・シュンペーターが、きわめて綿密なる書評をおこなっている¹⁾。

シュンペーターはまず、ゾンバルトが考えているように、その「後継者であろうとなかろうと——いずれにしてもゾンバルトは、精神的にはマルクスにも、また歴史学派にも由来している」(前掲論文集, 226ページ)という。

まず、新歴史学派の創始者でありゾンバルトの師でもあるシュモラーと、ゾンバルトとの関連を見る。

ゾンバルトも歴史的構成とディテール研究の諸結果との結びつけ、という方法的基本要請から出発する。シュモラーはかかるディテール研究の事実的遂行に、重点をおいていた。これに反し、ゾンバルトは、学問的シテューションと共に変化した課題の直線的形成が、その構成の重点であった。両者の相違をこうシュンペーターは述べている(同, 223ページ)。

次いで、マルクスとゾンバルトとの関連について、シュンペーターのいう所を聞こう。

既に述べたように、ゾンバルト自身は、マルクスと自身との研究方法や論述方法の相違を、主として両者の著述した時代の相違に帰せしめている。しかしシュンペーターは、この相違は両者のパーソナリティの違いに由来するという。そして次のような印象的文章でこれを訴えた。すなわち、

「マルクスは分析し、ゾンバルトはスケッチする。マルクスは一生、イデーないし意図にしたがって唯一つの思考行程を論述した。ゾンバルトは

しての多さは、基本的には両者の資本主義研究での親近性を、暗黙の内に物語っているもの、といえるのではなかろうか。

- 1) Joseph A. Schumpeter, 1883–1950, Sombarts Dritter Band, Schmollers Jahrbuch für Gesetzgebung, Verwaltung und Volkswirtschaft, 51. Jahrg., 1927, S. 349–369. ただし本稿では、シュンペーターの論文集 *Dogmenhistorische und biographische Aufsätze*, Tübingen 1954, S. 220–240. による。

いくつもの印象をもち、それらを記録した。マルクスは問題の解決に格闘し、ゾンバルトは視点をまき散らし、それらをそれぞれの運命に委ねる。マルクスは解答に関心をもち、ゾンバルトは問題に関心をもつ」(同、227-228 ページ)。「マルクスにあっては人間の前に資本が、……ゾンバルトでは資本の前に人間が現れる。マルクスにあっては事物の本質的なこと〔資本の論理〕が、ゾンバルトでは比較的副次的なものとなり、それゆえに、資本と資本主義との橋渡しが欠けてしまっている」(同、238 ページ)。

シュンペーターはゾンバルトの『近代資本主義』第2版、第3巻を通して、いわばゾンバルトの学風ともいわるべきものを、シュモラー、マルクスの学風を介して、以上のように総括した。

その上でシュンペーターは、この著作の個別的側面での長所や短所をいくつもあげている。たとえば、

ゾンバルトの、国家や19世紀の財政政策の精神の取り扱いが不十分であること¹⁾、

彼の技術的進歩のオートメーション化の叙述はハイライトであること、労働力の調達に関するゾンバルトの論述は、この著書のすぐれた部分で

1) 財政学研究者としての私には、財政社会学者としての側面をもつシュンペーターのこの批判は、おおむね妥当であると考えざるをえない。

近代資本主義が完全に自らの理念を展開させて支配的経済体制となった、高度資本主義の時代にあっても、国家ないしその財政(政策)の役割は、漸次変化していった、と考えられるからである。

たとえば、スミスの経済の「自然的自由の体系」にもとづく、法治国家論的・経済効率的「小さな政府」論の支配は、19世紀後半以降には、J. S. ミラー Ad. ワーグナー流の、自由資本主義的生産の成果の分配段階での、ある程度の是正的介入を不可欠と考える、社会政策論的・福祉国家論的「大きな政府」論の支配の方向に動きつつあったこと。そしてその傾向が、20世紀に入ってもますます徹底化されるようになり、ついには1930年代以降は、国民経済全体への管理者国家経済論的「大きな政府」観にもとづく財政政策論の、抬頭を見るに至るのである。

これらに関連する事項などは、19世紀最高の財政学者の一人であり、「経費膨脹の法則」や社会政策的財政論の提唱者でもある、ワーグナーの門弟でもあったゾンバルトには、是非とも考慮に入れ、論述してもらいたかった、と私には思われるのである。

あること、などが述べられているのである。

以上のようなシュンペーターの書評を通して、学派は異にするが、同じく20世紀前半のドイツ経済学界の年長の代表者であるゾンバルトへの、彼のライバル意識が、私にはひしひしと感ぜられるのである¹⁾。

-
- 1) 同様な感概は、ゾンバルトの死後十数年にして公刊された、シュンペーターの遺著『経済分析の歴史』1954年 *History of Economic Analysis*, edited from Manuscript by Elizabeth Boody Schumpeter, New York, Oxford University Press, 1954. でも変る所はなかった。

この書物の815ページ以下では、「『最新』youngest 歴史学派」の標題のもと、その代表者としてアルトゥール・シュピートホフ Arthur Spiethoff, 1873-1957, ゾンバルト, マックス・ウェーバーの三人がとりあげられている。

かれら三名の内、シュピートホフをあげることに異論があるかも知れないが、後の二人には殆ど異論はない、といわねばなるまい。

いつもながらシュンペーターは、ゾンバルトの経済学的業績にたいしては、きびしい(ないしはきびしすぎるほどの)評価を下している。たとえば、『近代資本主義』はここであげらるべき、ゾンバルトの唯一の学問的業績であること、

しかし、これはしばしば内容なき外見上の才気で、専門歴史家たちにショックをあたえたものであること、

しかも、この内には真に研究と呼びうるほどのものが見られないこと、にもかかわらず、これはある意味で歴史学派の頂点を示す著作であり、その誤謬ですら非常に刺戟的なものであったこと、などをシュンペーターは皮肉をまじえて述べている。

しかしそのシュンペーターが、新世代の歴史学派の代表として、経済分析の歴史という視点からの経済学史上の人物として、ゾンバルトをあげるべきだと考えていたこともまた事実であった。

とにかく、ゾンバルトの『近代資本主義』は、一般経済史のタイプでもなく、シュモラーの『一般経済学綱要』Grundriß der allgemeinen Volkswirtschaftslehre タイプでもない、歴史学派的総合の第3のタイプの代表である、とシュンペーターはいう(同、817-818ページ)。それは歴史のプロセスに関する、芸術家的資質を具えているヴィジョンというものであり、歴史的事実をもって培われ、かつ素朴な分析的図式を手段として表現することによって、科学的領域のものになった、理論史ないし体系史である。この著作ではあらゆる部門化は排され、歴史的過程の全体の内でも働くあらゆる要因は、すべて現われているという包括性をもつものである(同、818ページ)。

結局、ゾンバルトの成功は、個人的諸資質の並外れたコンビネーションによる、とシュンペーターは総括的に評価したのである(同、818ページ)。

第4節 近代資本主義研究の一帰結——ゾンバルトとウェーバーの資本主義文化観——

ゾンバルトの三十年余にもおよぶ『近代資本主義』研究を通じて、彼は資本主義のうみだした文化へのペシミストぶりを徹底させ、ついには資本主義自体への、後ろ向きの態度をとる境地に到達したようである。

資本主義が「なんらの文化的に意義あるものをうみださなかったし、しかも全将来に亘っても、うみださないであろうことを、われわれは知っている」。「われわれは資本主義からの反転と転向にのみ、救済をみとめうるのである」(いずれも『近代資本主義』III, XXI ページ)。

というのも、若い時代からゾンバルトが情熱を傾けて研究を続けてきた、資本主義を克服するはずの社会主義やマルクス学説が、結局は、資本主義的価値観の上に立つものであるという帰結に、彼自身 1920 年代には到達せざるをえなかったからである¹⁾。

社会主義の母としての資本主義という、資本主義的価値観の上に立っているがゆえに、「マルクスの顔は前方を向いていたが、われわれのは後ろをふりかえているのだ」(『近代資本主義』III, XXI ページ)。このゾンバルトの言葉は、一面では、科学の名において価値判断の排除に同調しているものでもある。

『高度資本主義時代の経済生活』1927年の序言で述べた、ゾンバルトの上の言葉は、若き日から続けた社会主義やマルクス研究と相俟って、資本主義研究をも一段落させたゾンバルトがたどりついた、文化理想主義の境地の表現であったのだ。

1) このことは、1924年のドイツ社会政策学会でのゾンバルトの報告「階級闘争の理念」*Die Idee des Klassenkampfes* や、版を重ねた著作『社会主義と社会運動』の第10版『プロレタリア社会主義』全二巻、1924年 *Der proletarische Sozialismus* ("Marxismus"), 2 Bde., Jena 1924. がきわめて印象的に物語っている。

しかもかかる境地への到達には、第1次大戦末期から1920年代前半におよぶ（ないしは1930年代にもおよぶ）、破局的インフレーションを含むドイツの政治的・社会的・経済的大混乱や大変革の時期に際会し、老年期の人間ゾンバルトも、大いなる不安と苦しみを経験したであろうことにも、かなりの程度由来するのかも知れない¹⁾。

これらのことが、文学者の・芸術家の気質で、同時に非常にプライドの高い、しかも俗人くさい情緒の感覚をもち合わせていた人間ゾンバルトの、資本主義経済体制の支配下での、文化への絶望感をうむ一要因ともなったのであろう。

彼はいわゆる文化理想主義者として、現実の資本主義体制にも、また、これを克服するはずであった、マルクス主義的社会主義体制にも、敵対的な社会観、文化観を示すことになったのである。

このようなゾンバルトの内面的な根本的変化は、1930年代に入ると、あたかもナチスの政権掌握と歩調を合わせるかのような形で、人間の経済、社会、文化のあるべき姿を体現するものとしての、経済的には完結したアウトアルキー（国民経済的自給主義）化を目ざす、彼独自の保守的・国家社会

1) この時期に味わったゾンバルトの苦悩の大きさは、当時の日本人とかわりをもった若干の事柄を、ゾンバルトの側に立って想像するだけでも、そのおおよその見当はつくであろう。たとえばゾンバルトには、

1. 1923年はじめ、誇り高いベルリン大学の経済学正教授でありながら、破局的インフレーションのもとでドル稼ぎの必要から、日頃見下していたであろう日本人留学生に、ドル建ての授業料を受取って、個人教授をせざるをえなくなったこと、

2. ゾンバルトが現役の研究者、大学教授であるにもかかわらず、経済学および社会主義に関する彼の貴重な蔵書11,574冊を、売却するに至ったこと、そしてこの数年に亘る懸案であった、蔵書の売却先が1928年には決まり、それが日本の大学（大阪商科大学）であったこと（大阪市立大学付属図書館所蔵『ヴェルナー・ゾンバルト文庫目録』ゾンバルト文庫目録刊行会編、日本評論社、1967年）、などがあった。

なお、上記の二つの調査にあたっては、大阪市立大学出身の安田保氏（三菱商事）に協力いただいた。また、上記の1、2の記述とも、主として Friedrich Lenger, 1957-, Werner Sombart, 1863-1941. Eine Biographie, München 1994, S. 259-278 によった。

主義的文化理想主義への信仰告白のような『ドイツ社会主義』1934年 *Deutscher Sozialismus, Berlin-Charlottenburg 1934*. を世に問わしめたのである¹⁾。時にゾンバルト七十一歳であった。

本書でゾンバルトは、近代資本主義体制下でのここ百五十年間の、人間生存の基本的価値基準を、経済(的利害)の価値が他の諸価値を圧して優越しており、経済のもつ特性が、この時代のすべての社会や文化を特徴づけているがゆえに、「経済時代」*das ökonomische Zeitalter* と総括した。

そして

繁栄と進歩への信仰

貨幣価値の徹底的承認

人間生活の快樂価値方向へのねじ曲げ

等々といった価値基準のみを重視する傾向をもつ、「経済時代」的生活様式のもつ文化的荒廃からの全面的な転向体制。これこそが、ドイツのため的一种の社会的規範主義としてのドイツ社会主義というものだ、というわけである。

これは国家ないし為政者の力による社会主義であり、文明から文化の価値体系へ、進歩の信仰からの解放、祖国と神への忠誠、といった方向で押しすすめられる。

そしてドイツ経済は、ドイツの軍事的・民族的・経済的理由からの、完結したアウトルキー化を旨とする経済体制への移行、包括的・統一的・多様な計画経済化を旨とするのである。

若干具体的にいうならば、

農業、手工業を重視拡充させ、これへの資本主義的精神の侵入を防ぐこ

1) そこでゾンバルトの文化理想主義的社会思想については、その概要をすでに本稿冒頭であげた拙稿「アードルフ・ワーグナーとヴェルナー・ゾンバルト——ゾンバルトとその周辺の人々——」第3節『農・工国家』と『ドイツ社会主義』2. ゾンバルト『ドイツ社会主義』1934年、で紹介しておいた。それゆえ本稿では、これについてはごく簡単に述べるにとどめた。

と、

(大銀行、巨大交通産業、国防産業など) 大経営の適宜適切なる公営化や協同組合化の促進、

ゆるやかな技術的・経済的進歩の保持、

国家による雇用拡大政策の採用と、その推進のための通貨・信用政策の展開、などがこれである。

さて、ゾンバルトと同時代の戦友マックス・ウェーバーもまた、近代資本主義のもつ社会的・文化的意義を重視してきた人物であった。このことは、ゾンバルトと共に雑誌旧「ブラウンス・アルヒーフ」の編集を引き継いだ時、ウェーバーが執筆したといわれる、既述したその創刊号、1904年の「序言」の内容からも容易に理解できるであろう。

ウェーバーは、近代資本主義の人間生存にたいしてもつ意義を、西欧近代社会の合理化過程の、「世界の魔術からの開放」*die Entzauberung der Welt*の一環としての側面から、これを抱えようとしていた。そして、「まさに究極の、最も純化された諸価値が世間公衆から隠れてしまったのは、……現代に特有の合理化と知性化 *Intellektualisierung*、とりわけ、世界の魔術からの解放という、現代の宿命である」¹⁾、とした。この際、社会学者としては、没価値的態度、「知的誠実さ *Rechtschaffenheit*」²⁾に終始すべきことのみが要請されうる、と考えていたウェーバーは、あらゆる幻想を捨てて、あくまでこの時代の宿命に「男らしく」耐えてゆかねばならない、と覚悟を決めた。そして、「自分の仕事をすすめて、『時代の要請』に適應すること」³⁾を自らにも課したのである。

マックス・ウェーバーは、妥協をゆるさない厳格な社会学者としての

1) 『職業としての学問』1919年、マックス・ウェーバー全集、I/17、109ページ *Wissenschaft als Beruf*, 1919, in: *Max Weber Gesamtausgabe, Abteilung I, Band 17, Tübingen 1992, S. 109.*

2) 同上、97ページ。

3) 同上、111ページ。

立場を貫き、いわば超人的意志力でこの時代の宿命に耐えてゆこうとした。そして事実、彼は生涯に亘り、学問の名において資本主義の文化的意義などについて、価値評価的発言をなすことを控える、という基本態度を守り続けえたのである。

ゾンバルトとウェーバー。この両者の近代資本主義（文化）にたいする基本的態度の違いの由来する所は、もちろん、両者の生涯を終えた時期の早い遅いにも、なにがしかは由来するのではなからうか、とひそかに私は考えている。

マックス・ウェーバーは1920年という、まさに第1次世界大戦後の破局的インフレーションが始まる前に、すなわち、大戦前の社会的体制の基本が隔々に至るまで破壊しつくされる前に、1920年、五六歳の若さでこの世を去ることができた。これは彼の学者としての信条を、生涯を通じて貫徹しやすくさせた要因の一つ、ともなっているのではなからうか。

既述のようにゾンバルトは、ウェーバー没後の1920年代のドイツの大混乱の下で、のたうちまわり、1930年代のヒトラーの政権奪取から第2次世界大戦へと進んだ、その大戦のさなかの1941年が、彼の没した年であったのだ。いわばこの二十年をこえるドイツの社会的諸状況の大混乱と、これに対処せざるをえなかった、ゾンバルトの老年期の苦悩とを抜きにしては、彼の晩年に到達した文化理想主義的悲観論は、語りえないことではなからうか、と私には思われる。

付記

本稿は、平成12年度成城大学教員特別研究助成にもとづく共同研究「ヨーロッパ世界の社会・経済思想」における、筆者分担分の研究成果の一部である。